『獣欲の顎　騎士団長邪淫閉牢』サンプル

目次

登場人物紹介
第一話　聖騎士団長、敵国の妖術帝に捕縛される
（サンプル掲載はここまでとなります）

（以下、製品版収録）
第二話　聖騎士団長、敵国の民の前で晒し者として辱められる
第三話　聖騎士団長、スライムの愛撫に屈服する
第四話　聖騎士団長、妖術帝ベルシィに仕置きされる
第五話　聖騎士団長、雄膣の快楽で精通する
最終話　元聖騎士団長、邪淫に沈む

登場人物

オーヴィル
アースランド公国聖騎士団長。29 歳。
聖騎士団は大いなる加護と引き換えに精通すら許されぬ童貞を求められる。
平常時 10.8 センチメートル、勃起時 24.6 センチメートルの皮冠仮性包茎。

妖術帝ベルシィ
アースランド公国と国境を争うベルンハイム帝国の支配者。
聖騎士団長オーヴィルを一匹の雄として辱め、快楽に堕落させようと目論む。

イスム
アースランド公国聖騎士団副団長。
近日、絶対禁欲の誓いを破り普通の男に戻る予定。

【お願い】
この小説は金目によるフィクションであり、現実に存在する個人・団体などとは無関係です。
無断転載・私的利用の範囲を超えた共有など、著作権法に触れる行為は控えていただきますようお願いします。
この作品は犯罪行為を推奨するものではありません。フィクションとして、お楽しみください。
作中の性行為描写はすべてファンタジーとなります。現実のセックスへの参考になさらないようお願いします。

第一話

「ニゲロ……ニゲロ……」
　かつては屋根のある建造物であったのだろうが、今は柱と梁が残るだけの遺跡を緑色の肌をした小鬼ゴブリンが逃げ惑う。
「油断するな、一匹残らず掃討しろ！」
「応！」
　オーヴィルは聖騎士団長として配下の聖騎士団二名、そして、近隣の村から集めた自警団員十五名らに力強く号令をかけた。
　オーヴィルは 29 歳。
　男盛りが近づいたその顔は自身に満ち溢れ、男らしく、けれど、雄臭さを感じさせない不思議な魅力を放っていた。
　例えるならば、生身の雄ではなく、神が男性という概念から性の淫らさを取り払ったかのような清廉な概念が形を取った、というべきか。
　これは決して滑稽な誇張ではない。
　アースランド公国聖騎士団員は、その全員が精通すら拒む絶対禁欲を鉄の掟とし、絶対禁欲と引き換えに大いなる加護を得ている。
　聖騎士団入団試験受験資格があるのは、精通を迎える前の男子のみ。
　幼い頃から、それこそ、物心ついたころから訓練と勉学に明け暮れなければ合格できない狭き門を抜け、同年代の男たちが精通を迎え、性の悦びを享受するようになってもなお、絶対禁欲を貫くエリートが聖騎士団なのだ。
　聖騎士たちは絶対禁欲を遵守している間、精通をすることはない。
　精通をするには、破約の言葉を宣言して大いなる加護を返上しなければならない。
　とはいえ、聖騎士たちもまた健康な男である。
　故に、性感も正常であり、性欲も年と共に膨れ上がっていく。
　大抵の聖騎士は 20 代前半に性欲に負けて大いなる加護を返上する。
　だからこそ、29 歳という年になるまで、成熟した己の雄の機能に逆らい、聖騎士団に所属し続けているオーヴィルの鋼の意志と絶対禁欲遵守の決意の重さが分かるというものだ。
「オノレ……ニンゲン……
　ホノオ！　ホノオ！　ホノオ！」
　三角帽子を被ったゴブリンが先端に頭が三つついた杖を振りながら叫ぶと、ゴブリンの周囲に一抱えもある大きさの火球が八つ浮かび上がった。
　火球の一つでも人間一人を焼き殺すには十分な熱量だ。
　それが八つ。ゴブリンにしては恐るべき魔力だ。
「ひえええ」
　その火球を見た自警団員の若造が顔を手で覆う。
　ゴブリンの中には稀に魔法を使う個体であるゴブリンシャーマンがいる。
　どうやら、自警団員の若造にとって魔法を使うゴブリン、あるいは魔法を向けられること自体が初めての経験なのだろう。
　オーヴィルも、火球を八つも生み出すゴブリンシャーマンは初めて見る。

　オーヴィルは自警団員の若造の前に駆け出した。
「ウケヨ！」
　ゴブリンシャーマンが火球を放つ。
　自警団員は腰を抜かしたのか逃げようともしない。
　オーヴィルはその前に仁王立ちになり、火球から自警団員の若造を守る。
　オーヴィルに火球が全て炸裂した。
「ナニイイ！」
　ゴブリンシャーマンが驚いた声を上げた。
　オーヴィルは無傷だったのだ。
　そう。これこそが聖騎士団に与えられた大いなる加護。
　精通すら許されぬ絶対禁欲と引き換えに得た加護は、望んで受け入れない限り、あらゆる魔法と毒をかき消す大いなる盾なのだ。
　杖を捨てて逃げ出そうとするゴブリンシャーマンをオーヴィルは追いかけた。
　聖騎士団にとって、魔法などそよ風に等しい児戯だ。
　けれど、自警団員の若造の反応を見ればわかる通り、一般の兵士たちにとっては脅威でしかない。
　ここで逃がしては後の脅威となる。
　ゆえにオーヴィルは逃げ出すゴブリンシャーマンに慈悲も与えず、背中から一閃して斬り捨てた。
　オーヴィルは周囲を見回した。
　遺跡に巣くい、周囲の村々の畑を荒らしていたゴブリンの死体があちこちに転がっており、聖騎士団と自警団を除いては動いている者はいない。
　掃討が完了したとみていいだろう。
「よし！
　これにて作戦を完了する！」
　オーヴィルが剣を突き上げて宣言すると、聖騎士団と自警団の勝鬨が響き渡った。

　オーヴィルらはゴブリンの死体を並べていた。
　隣国であるベルンハイム帝国から解放したこの地域は、ゴブリンなどの魔物に悩まされることが多い。
　今回討伐したゴブリンの数が十八匹。
　そこそこの大きさの群れだ。
　しかし……
　オーヴィルは考え込んだ。
　ゴブリンシャーマンが所持していた杖は、ゴブリンが持つには不釣り合いなものであったし、そのゴブリンシャーマンが駆使した魔術も、ゴブリンの基準から考えると異様なものであった。
　その上、それだけの魔術を使えるゴブリンシャーマンがいながら、近隣の村々が受けた被害は畑の作物を荒らされるという、比較的軽微なもの。

　ちぐはぐだ。
「あ、あの、先ほどはありがとうございました」
　先ほど庇った自警団員に声をかけられ、オーヴィルは思考を中断した。
「お、俺、死ぬかと思いました。
　そう思ったら怖くて……
　足を引っ張ってしまってすいませんでした」
　まだ青ざめた顔をしている自警団員を励ますべく、オーヴィルは彼の肩に手を乗せた。
「公国の民の盾となり、剣となるのが我ら聖騎士団だ。
　この身は、この公国のためにあるのだ。
　俺は、村のために勇気をもって自警団に入った君を尊敬するよ」
　オーヴィルの本心からの言葉に、自警団員が顔を赤らめた。
　オーヴィルは、聖騎士団団長である己に奢ったことはない。
　聖騎士団員が、絶対禁欲遵守をする横で一般男性が男の快楽を享受していることへの嫉妬もない。
　ただ、このアースランド公国のために、それぞれができることをすればよいと考えているのだ。
「クックックックック……」
　オーヴィルの言葉を侮蔑するかのような笑い声が遺跡に響いた。
　オーヴィルらは周囲を見回すが、聖騎士団員や自警団員らは顔を強張らせているだけで笑っている様子はない。
　オーヴィルは鋭い目をして周囲を見回し、それに気が付いた。
　先ほど斬り捨てたゴブリンシャーマンが持っていた三つ首の杖が笑っているのだ。
　三つ首の杖が、すうっと宙に浮かび上がった。
「いやはや、我らが国土を解放の名目で簒奪した偽りの栄光の体現者は言うことが違う」
　三つ首の杖が笑いながら喋り出した。
「無礼な！」
　聖騎士の一人が三つ首の杖に斬りかかる。
　だが、三つ首の杖に剣が触れるかどうか、というところで硬質な音が響き、聖騎士が弾き飛ばされた。
「やれやれ、聖騎士とは名ばかりの犬畜生は、話を聞くということもできぬのか。
　我が名はベルシィ。
　ベルンハイム帝国を治める者なり」
「妖術帝か！」
　オーヴィルは三つ首の杖を詰問する。
　その背に冷や汗が流れ始めた。
　ベルンハイム帝国とは、アースランド公国の隣国にして、魔物を操る下賤な術を受け入れている悪徳の国だ。
　ベルシィは妖術帝の二つ名で恐れられている皇帝で、その妖術は海を血で染めることすら可能と言われている。
　その術の深淵と、帝国が有する魔物の戦力は恐るべきものであり、アースランド公国も悪

徳の帝国を討伐する準備こそ進めているが、まだ足りないというのが実情だ。
「いかにも。下々の者は我をそう呼び、恐れている。
　我らが国土を簒奪した侵略者よ、正義を僭称するアースランド公国の犬よ」
　杖がクツクツと笑い続けている。
「犬が語るには大儀とはあまりにも大きく、重いもの。
　故に、我が許す。
　その大言壮語の誤りを認めるのだ。
　犬に、偽りの正義を騙るこの国を守ることなど不可能よ」
「不可能ではない！」
　オーヴィルは三つ首の杖の言葉を否定した。
「俺は、聖騎士団長としてこの国を守る者だ。
　この国の民の一人とて、取りこぼしたりはせん！
　皆の者、恐れるな！
　彼の者は、我らの恐怖を糧とする邪悪だ！」
　オーヴィルの言葉に、聖騎士団員や自警団員の顔が引き締まった。
　喋りながら笑い続けていた三つ首の杖が黙り込んだ。
「では、試させてもらおう」
　三つ首の杖が唄うように妖の言葉を連ね始めた。
　周囲の魔力が三つ首の杖に収束していくのをオーヴィルは感じた。
「皆の者、散開しろ！」
「遅いわ！」
　三つ首の杖が赤く光った。
　その光が一直線に上空に突き刺さると、空が燃え上がった。
　いや、違う。
　オーヴィルらの頭上に数えるのも馬鹿馬鹿しいほどの火球が浮かび上がったのだ。
　しまった……
　オーヴィルは己の失態を悟った。
　三つ首の杖は恐らく、オーヴィルらと真面目に問答をする気はなかったのだ。
　ただ、術を準備していることを誤魔化すためだけに喋り、時間を稼いでいたのだ。
　でなければ、この短時間でこれほどの火球を生み出せるはずがない。
　オーヴィルがするべきだったのは、三つ首の杖との問答ではなく、自警団員らへの退避命令だったのだ。
　聖騎士団員は、絶対禁欲の対価として加護を得ている。
　だから、これほどの火球が降り注ごうが無傷で済む。
　けれど、一般人である自警団員は違う。
　火球が一発当たっただけで、死んでしまうだろう。
　そして、オーヴィルを含めた聖騎士団三名で、十五名の自警団員全員を庇うことは不可能だ。
「どうやら、状況を理解できたようだな」
　三つ首の杖が再びクツクツと笑いだした。

　オーヴィルは何も言えない。
「聖騎士団長殿、皆を救う手立てを教えてやろう」
　三つ首の杖の前に緋色の首輪が浮かび上がった。
「全裸となり、その首輪を自らの意志で装着するのならば、自警団員らの命は助けてやろう。
　お主ら、聖騎士団員に我の術を解く方法がない以上、皆を救うには汝が犠牲になるしかないだろう」
「いけません、オーヴィル団長！」
「妖術帝の言葉を信じてはなりません！」
　三つ首の杖の言葉に、部下である聖騎士団員たちが悲鳴のような声を上げる。
　自警団員たちは歯をカチカチと震わせて震えている。
「生憎、正義を僭称する者どもと違い、我は嘘をつかぬ。
　信じるかは、勝手だがな」
　三つ首の杖がゆらゆらと震えている。
　オーヴィルは剣を一閃させた。
　ギイイイイイイイン！
　三つ首の杖を両断しようとした刃は不可視の壁に遮られて届かない。
「己の無力を確認したいか。
　我は気が長くない故、早めに決断するがよい。
　言の葉を違えて、己らだけが生き残るか、己の身を犠牲にして、自警団員らを守るかをな」
　三つ首の杖がオーヴィルを嘲笑うかのように歯を打ち鳴らした。
　オーヴィルは考えた。
　妖術師が嘘をつかないというのは、本当なのかどうか分からない。
　三つ首の杖の言葉が本当ならば、オーヴィル一人の犠牲で自警団員十五名を守れる。
　だが、三つ首の杖の言葉が嘘だった場合、オーヴィルが何をしようが、十五名の自警団員は火球に焼かれて死ぬ。
　オーヴィルは己の尊厳と、十五名の自警団員の命を秤にかけた。
　聖騎士団長として数々の任務をこなしてきたオーヴィルにとって、命は惜しむものではない。
　己が命を盾としてアースランド公国を守護することこそ、己の務めだと信じている。
　けれど……
　オーヴィルは全裸になることを逡巡した。
　アースランド公国の風習では、風呂以外の屋外で性器を露出させることははしたないことだと見做されている。
　そして、オーヴィルは己のチンポにコンプレックスを抱いている。
「分かった」
　けれど、オーヴィルは三つ首の杖の言葉を受け入れた。
　考える間でもないことであった。
　アースランド公国の民を守るために、オーヴィルは聖騎士団に入団し、団長として絶対禁欲を遵守し続けてきたのだ。
　同輩たちが、成熟した雄の本能に負けて、絶対禁欲の誓いを捨てて聖騎士団を去っていく

中、アースランド公国の全ての民に平穏あれ、という祈りを支えに聖騎士団を支え続けたオーヴィルにとって、自警団員を見捨てることなどありえないことなのだ。
　己の恥など、自警団員たちの尊い命に比べれば些細な問題ではないか！
　オーヴィルは鎧を脱ぎ捨てた。
　オーヴィルの鋼の意志と克己心に相応しい屈強な体躯が衣服越しに男たちの尊敬のまなざしを集める。
　オーヴィルはそのまま、衣服に手をかけた。
　まるで脱衣場であるかのように、躊躇いもなく、服を脱ぎ始める。
　鎧のような屈強な筋肉とそれを彩る体毛が露わになる。
　体毛は平均的な男性よりも濃く、オーヴィルが普段抑え込んでいる雄の本能の濃さを反映しているかのようであった。
　オーヴィルが下着一枚になる。
　体毛が示す雄の本能の濃さを反映しているかのように、オーヴィルの下着は盛り上がっている。
　オーヴィルは片方の手で股間の小山を隠した。
　そして、もう片方の手でゆっくりと下着を下ろす。
　オーヴィルの手の隙間から立派なチンポが姿を覗かせた。
　常人よりも太い陰茎に精通すら抑え込んで精力を溜め込み続けている大振りの金玉。
　雄の憧れに近いチンポのように見える。
　オーヴィルは下着を足から引き抜くと、両手でチンポを隠した。
　その様子は、性器をむやみに露出するものではないというアースランド公国の風習を踏まえたうえでも、あまりにも貞節に過ぎるものであった。
「騎士団長殿、両手でチンポを隠したままで、どうやって首輪を身に着けるのかな」
　三つ首の杖が歯を打ち鳴らしてオーヴィルを嘲笑う。
「くうぅ」
　オーヴィルは歯ぎしりをした。
　だが、三つ首の杖の言葉には理屈が通っている。
「頼む。見ないでくれ」
　オーヴィルは聖騎士団員や自警団員たちにそう告げると両手を己のチンポから離した。
　そこには、皮冠の見本とも言うべき皮が余った亀頭があった。
　そう、オーヴィルのコンプレックスとは、皮冠なのであった。
「おやおや、聖騎士団長殿は見事な皮冠。
　そこまでして童貞を守ろうとは、いやはや、恐れ入る」
　三つ首の杖の言葉にオーヴィルは顔を真っ赤にした。
　アースランド公国の男たちは年頃になると自然に露茎する。
　そんな中、皮が余ったままでちっとも剥けない己のチンポが、オーヴィルにとって男らしさを損なう大きな傷であった。
　いや、そうしたコンプレックスを抱えていたからこそ、オーヴィルは誰よりも聖騎士たらんと努力をし続け、聖騎士団長にまで上り詰めたのだ。
　その努力を考慮すれば、オーヴィルのコンプレックスは些細なこととも言える。

けれど、オーヴィル自身には、そんな理屈など何の慰めにもならない。
オーヴィルは隠しておきたかった皮冠チンポを露出させられた屈辱に震えることしかできない。
オーヴィルは緋色の首輪を手に取ると、素早く首に装着した。
三つ首の杖が用意した道具なので、何かしらの刺激があるかと思ったが、そんなものはなかった。
首輪を装着したオーヴィルは、素早く両手で皮冠チンポを隠した。
「聖騎士団長よ、チンポを皆に見せるがよい」
三つ首の杖が告げるが、オーヴィルは無視しようとした。
それは、約束には含まれていないし、コンプレックスでしかない皮冠チンポを好き好んで見せたいとも思わなかったのだ。
けれど……
「なんだと！」
オーヴィルは声を荒げた。
オーヴィルの両手が勝手にチンポから腰に移動し、みっともないとオーヴィルが思い込んでいる皮冠チンポを露出してしまったのだ。
オーヴィルは歯を食いしばり、両腕に血管が浮き出るほどに力を込めて動かそうとするが、腕はちっとも動かない。
「くはははは。これぞ、聖騎士団を玩弄するために我が用意した魔道具よ。
教えてやろう、聖騎士団長殿」
三つ首の杖がオーヴィルを嘲笑いながら、オーヴィルの周囲を旋回した。
「その首輪は、自らの意志で装着した者から一切の加護を奪い去るのだ。
その効果はこの通り。
ちょいと魔力を込めただけの我の言葉で身体が勝手に動くほどよ」
三つ首の杖の言葉にオーヴィルは背筋が震えた。
それはつまり、聖騎士団としてのオーヴィルの能力が無価値になった、ということだ。
今、三つ首の杖に魔術を仕掛けられてもオーヴィルは無効化できない。
三つ首の杖が戯れにオーヴィルを凍らせようとしても、燃やそうとしても、オーヴィルには打つ手がないのだ。
唐突に眼前に突き付けられた死の予感にオーヴィルは歯を震わせた。
「だが、安心するがよい」
三つ首の杖がオーヴィルの正面に浮かんだ。
「その首輪は代わりに、装着者の命を守る。
そして、装着者の口だけは操れぬ。
意味が分かるかな」
三つ首の杖がにやりと笑った。
「聖騎士団長殿は、自らの意志で破約の言葉を宣言しない限り、聖騎士のままでいられるということよ。
まあ、その首輪を外す手立てがない限り、我の玩具であることに変わりはないがな。
では、参ろうか」

　三つ首の杖の言葉と共に、オーヴィルの周囲の景色が歪みだした。
「聖騎士団長殿は我の玩具として預からせてもらおう」
　三つ首の杖の言葉にオーヴィルは己と三つ首の杖が転送魔法でどこかに連れていかれようとしていることを悟った。
　恐らくはベルンハイム帝国のどこかだろう。
「お前たちに真実を教えてやろう。
　聖騎士団長殿は自らの意志で我の玩具となり下がる。
　この未来を変える術は何人にもない、ということをかみしめて、尻尾を丸めて逃げかえるがよい」
　オーヴィルの周囲の景色がどんどん黒く染まっていく。
　部下である聖騎士たちがオーヴィルに手を伸ばし、三つ首の杖を斬らんと剣を振り下ろすが、伸ばされた手はオーヴィルに届く前に空中で弾かれ、三つ首の杖を斬らんとする試みもまた、虚空で弾かれるという結果に終わった。
「では、聖騎士団殿。
　別れの挨拶に腰を振ってやるとよい」
　三つ首の杖の囁きにオーヴィルの身体が動いた。
　惜しむようにオーヴィルを見つめている自警団員たちの方にオーヴィルは向いてしまう。
　自警団員たちの正面に、己の皮冠チンポを晒してしまう。
　自警団員たちが青ざめた顔でオーヴィルを見つめている。
　オーヴィルの身体は、そんな自警団員たちの前で腰を振り始めてしまう。
　ぶらぶらと股間で皮冠チンポと金玉が無様に揺れている。
　こんな無様な姿を見せながら誘拐されなければならない己の惨めさにオーヴィルは歯を食いしばり、心の震えを抑え込むことしかできない。
　そして誓った。
　これほどの屈辱をオーヴィルに与えた三つ首の杖の持ち主である妖術帝ベルシィを何としても打ち滅ぼす、と。
　たとえ虜囚の辱めを受けようとも、三つ首の杖の言葉が真実ならば、オーヴィルの心が折れない限り聖騎士の誓いは継続する。
　ならば、たとえ敵地であろうとも、首輪を外すことさえできれば、卑劣な妖術帝ベルシィを討つことも不可能ではないはずだ。
「必ずや、貴様を討ち滅ぼしてみせるぞ、ベルシィ！」
　オーヴィルは己の心を奮わせるため、そして、聖騎士団員たちや自警団員たちに己の不在で心を折られぬように、あえて大声で叫んだ。
「くはははははははは、犬の吠えることよ」
　三つ首の杖が可笑しそうに笑った。
　そして、オーヴィルと三つ首の杖は虚空へと消え去った。
　アースランド公国の盾である聖騎士団長オーヴィルは、ベルンハイム帝国の妖術帝ベルシィに誘拐されてしまったのだ。

奥付

『獣欲の顎　騎士団長邪淫閉牢』より、第一話

初出：2020年10月29日
著者：金目

金目の同人活動一覧
【pixiv】
https://www.pixiv.net/member.php?id=22137005

【DLsiteがるまに】
https://www.dlsite.com/bl/circle/profile/=/maker_id/RG01002299.html

【ゲイ小説進捗状況呟きアカウント】
https://twitter.com/chigaya_deep